



中堅層が感じたアメリカでの土壌物理動向

西脇淳子¹

世界中、中堅層の元気がないのだろうか？ ASA, CSSA & SSSA International Annual Meeting に参加しての感想。

大御所陣のこれまでの研究紹介や自身の開発の宣伝など、勉強としてはたいへんためになる講演はあった。若者たちの新鮮な研究発表に触れ、初心に帰れる場面はたくさんあった。でも、何やらワクワク感が足りない。中堅層なのか、どうなのかと思われる人たちの発表は、データ紹介等に重きが置かれていた。そうなんだとは思えど、もっと知りたいという気持ちが湧かなかった。土壌物理の最先端に触れたく足を運んだ SSSA であったが、ワクワク感は得られなかった。他のセッション会場ではおもしろい発表があったのかもしれない。細分化され、見たい発表がぼつぼつと他会場に散らばっていることで全体を見渡すことはできない。自分の見てきた範囲だけの感じ方である。

以前はおもしろくて発表に聞き入っていた SSSA。なぜワクワク感が得られなかったのだろうか？研究を考察し、新たな展開を見つけ出す、そのような部分に重きが置かれていないように感じた。また、会場でディスカッションをするという光景に出合えなかった。自身の研究力はさておき、土壌物理に携わる他研究者の研究には絶大な信頼を置いている。これまでずっと土壌物理の研究報告を、すごいなあ、おもしろいなあと思って過ごしてきた。そのため、今回の SSSA は消化不良だった。中堅層が少ないのか、世界的に中堅層が忙しすぎて研究に重きをおくことができていないのだろうか？理由はわからない。来年（2018年）2月の帰国前に中堅層の海外研究者との絡みを得て、その辺りをうかがえればと思っている。

来年の帰国と書いたが、現在サバティカルで渡米中。アイオワ州立大学の Robert Horton 教授の研究室に在籍させていただき7か月が経過した。フィールドワークとラボワーク、データ採取に追われる日々を送ってきた。良いデータが得られているか、論文が書けるか、と少々不安になってはいるが、何もせずには帰れない。極寒と聞くアイオワでの冬籠り中に、何とかデータ整理から論

文執筆にこぎつけないと思う今日この頃（10月末時点）である。

長い文章の後に書くのもなんだが、土粒子執筆依頼をいただき、何について書こうか考えた。右往左往の研究遍歴（理学から農学への学生時代、理工から農へのポストドク時代）、迷走し続ける研究テーマ（地下水・土壌汚染から温暖化ヘシフトしたポストドク時代、環境から農業へのシフトを求められる現在）、日々発散し続ける研究内容（室内からフィールドへ、溶質移動からガス動態ヘシフトしたポストドク時代）などなど。いずれにしろまとまりのない文章になりそうだったので、現時点で感じていること、という括りで備忘録的に何かを書き残そうと思った。まだ渦の中で頭の中が整理できていない。帰国時にはまた違う考えが出てくるかもしれないが、現状としてアメリカでの研究生活は自身にとって有意義だと感じている。普段は見えないものが見えてくる、自分に足りないものを考えさせられる、研究と向き合う時間ができる、おおらかな気持ちになれる、などなど。日本では触れられなかった物事や感覚に触れることが出来ている。現時点での随想文、アメリカに来て感じたこと、良かったことをつらつらと書かせていただく。

アメリカに来て強く感じたことは、日本とあまり変わらないという点である。渡米中にやり取りをさせていただいた日本の先生とのメールを引用させていただく。以前に研究で渡米されていた方である。「異国の人はずいぶん違うように見えるけど、同じ環境に置かれれば、人はだいたい同じようなことを考えるものだということを知って自信を持ったような気がします。」本当にその通りだと感じた。着眼点、研究方法、最終的な到達点、どれも通ずるものがある。同じところにたどり着く。なぜ、アメリカや諸外国では研究成果を多く世に送り出せるのに、日本の研究は世界発信が少ないのだろうか？そんな疑問にぶちあたった。金銭的、公的制度での制約はもちろん大きい。大きすぎる。でもその他に、アメリカにきて日本人（わたしだけ？）に足りないと感じた点、自分たち自身で変えていけるであろう点について、わたしが見ることができている範囲で2点挙げてみる。

1 つ目は自信の無さ。自信が無いのは時に悪いことで

¹ 茨城大学 農学部

はない。その分慎重に計画を練りデータと向き合うので信頼性が増す。けれど、自信が無さ過ぎると何も生みださない。わたしは根っから自信のないペシミストである。海外で学位を取った人や海外で研究展開をしている人たちへの尊敬の念が行き過ぎ、劣等感が半端ない。そして、海外の研究者に恐れおののいている。学生で渡米できる人たちには、ぜひ米国で学位をとってほしいとは思ふ。しかし、アメリカに来て他国の人たちと話をしてみても、自分の研究能力や研究方法を卑下することはない、日本の研究教育もレベルが低いわけではないと感じた。自身の研究力はさておき、一般的に日本人の研究力は高いと感じた。丁寧で深みがある。他分野はわからないが、土壌物理関係者はみな真摯に現象や結果と向き合っている。データ取得方法も丁寧に信頼ができる。論理展開も、疑わしければ調べつくし、筋道が通る解釈をしていると思う。日本にはおもしろい研究成果がたくさんある。日本人はもっと自信を持って良いと感じた。ぜひ世界に日本の研究成果を発信していただきたいと思った。

2点目は、アピール力、交渉力、強引き。自身のペシミストすぎる感覚が原因かもしれないが、他国の人たちと接し、みんな（良い意味で）口がうまいと思った。自分の考えや研究成果に絶大なる信頼を寄せ、相手を納得させようとする。日本人的感觉では、自分のここがダメなのでは？などと不安を持ってしまいが、マイナスなこととは言わず、自分がもたらす利点をアピールする。日本人だけでなく、アジア人には消極的で謙遜しすぎる人もいるが、他地域の人たちには自分の意見を押し通す強さがあるように感じた。交渉するためには自信と論理的思考力が必要である。相手を納得させるには、自分の考えや行動をきちんと理解し、自信を持っていないといけない。日本の土壌物理に携わる人たちの研究力は高く、論理破綻する人も少ない。必要なものは自信と強さだと感じた。日本には世界レベルの研究が多いはずなので、ぜひアピールしていただきたい。世界的に少々クールダウン気味（中国は別で、とても盛り上がっているよう）と感じられる土壌物理を盛り上げていただきたい。

次に、アメリカで研究生活を送ることが出来て良かった点を挙げてみる。それは様々な背景の人に出会い自分の立ち位置を考えるきっかけを得られたこと、そして考える時間を持てたことである。前述の研究発信のための心持ちもそうだが、日々いろいろなものに触れ、もやもや思考を巡らせている。アメリカは生活する上での環境や雰囲気がおおらかだ。時間的な焦りもそれほど感じられない。欧米人や東洋人がそうなのか、わたしの会ってきた人たちがそうなのか、アメリカで流れている時間は日本とは違うように感じる。かく言うわたしも、時間（心？）に余裕が出来た。校務がないためか、土地柄か

はわからない。日本では降ってくる仕事と日々の焦燥感や切迫感で研究が片手間になっていたが、今は久しぶりに論文を読みふけり、無心で作業をし、データと向き合うことができています。学生時代に感じた、研究のおもしろさ、知らないことを知りたいという感覚を思い出している。

このような時間を得られたことにたいへん感謝している。運が良かったとしか言いようがないが、ぜひ皆さんにも、アメリカや諸外国での研究生活を送っていただければと思う。外に出てみると自分なりの世界が見えてくる。そんな時間はない、うまく行くものではないとおっしゃる方々は多いと思う。その通り。日本は忙しすぎる。もし行けるのであれば、ぜひ飛んでいただきたい。百聞は一見にしかず、百見は一体験にしかず。そして、その経験を生かし、日本から世界の土壌物理を盛り上げていただければと思う。

長々と偉そうな書きぶりご容赦ください。超ペシミスト人間が大きな気持ちで過ごせている、これもアメリカでの研究生活のなせる業かと思います。今の考えを忘れないためにも、この場をお借りして現在の思うところを書かせていただきました。アメリカではこんな感覚になるのか、と穏やかに読み過ぎていただければ幸いです。

何やら視点が発散して論理破綻を起こしていますが、情報提供の場として今回のサバティカル事情について少々記載させていただきます。茨城大学では一昨年から、サバティカル制度の実質化が動き始めました。これまでは制度はあれど教員陣が多忙すぎて利用できず、特に理系では不可能でした。世の国際化の流れもあり、理系教員を飛ばそうという学長の働き掛けで全学で年に2名程度が取得できる仕組みになりました。農学部では今年が初。同一学科から2名の応募があったため、決定前の会議やその他の場面ではいろいろありました（詳細は飲み会の席でも）。学部長の働き掛けで、農学部から2名が同時に飛べることになりました。ありがたい限りです。残り数か月の渡米期間ですが、何かしら日本に帰りたいという心持ちでいます。

最後になりますが、学部長をはじめ、現在学部の先生方や事務の方には校務等さまざまな面でご支援をいただいています。また、在外研究経験者の方々にはいろいろとご助言をいただいています。両親には研究に集中できる環境を作ってもらい、渡米中に出会ったの方々には生活面等でのご協力をいただいています。この感謝の気持ちも忘れないよう、この場に記させていただきました。土粒子執筆、備忘録作成の機会を与えてくださった編集委員の皆さまにも心より感謝申し上げます。感謝を成果に変えられるよう、将来的に在外研究をする方々のお役にたてるよう、残り数か月を充実させる所存です。